

4月21日 講演会 予告編

解明されたゾルゲ事件の端緒

—日本共産党顧問真栄田（松本）三益の疑惑を追って—

社会運動資料センター代表 渡部 富哉

渡部富哉氏は、日露歴史研究センター幹事として、ゾルゲ事件関係の多くの研究論文を、『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』（『翻訳集』と略記）に執筆するとともに、精力的に研究会で報告をされてきました。今回開催する講演は、自分の「ライフワークの集大成である」と位置づけています。（日程などについては下記の「講演会のお知らせ」をご覧ください）なお、この講演テーマを集大成した本を出版の予定です。ご期待下さい。

「ゾルゲ事件の端緒説」をめぐって

世界で唯一のゾルゲ事件研究誌『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』も、50号で終刊となります。

私は、1993年に『偽りの烙印』（五月書房、1993年）を出版、それまで流布していた、伊藤律がユダであるという「ゾルゲ事件の端緒説」が誤りであることを論証、今日では社会的に認証されるまでになっています。しかし、伊藤律でないならばいったい誰が？という設問に正面からどう答えるのかという難問がありました。顧みれば、4半世紀をゾルゲ事件研究につき込んできたこととなります。

「ゾルゲ事件の端緒は誰か」？それに答えようと、これまで「安田徳太郎と松本三益の名誉棄損裁判をめぐって—『聞き書き』と『戦前史の真実』を検討する」を『翻訳集』（No. 43～44）に掲載しました。

松本三益は当局のスパイである

この論文の最大の焦点は、松本三益に対する疑惑とその解明にありました。これにより、特高警察が、宮城与徳を安田徳太郎や高倉輝、九津見房子たちに紹介したのが松本三益ではなく、松本三益の妻ツルだと事実を曲げて供述させ、三益隠し[三益が特高のスパイである事実の隠蔽]を謀ったことを明らかにすることができました。特高は、松本三益をゾルゲ事件関係者と切り離すことで、辻褄を合わせ、九津見房子はそのために懲役8年の実刑を言い渡され、日本帝国敗戦に至るまで、和歌山女子刑務所に拘禁されました。しかし、その組織者（リクルートした人物）であるはずの松本ツルは、2ヵ月間の拘留で無罪釈放。松本三益もお咎めなしであった。こ

講演会のお知らせ

日時：4月21日（土）午後1:00～5:00

場所：明治大学駿河台校舎・リバティタワー

2階 1021号教室

演題：「解明されたゾルゲ事件の端緒—日本共産党顧問真栄田（松本）三益の疑惑を追って」

講師：渡部富哉（社会運動資料センター）

参加費：資料・1000円

沖縄の革新の元祖といわれる松本三益は当局のスパイだった、という衝撃的な真相を語る。

①沖縄教育労働者事件と三益、②九州2・11事件（西田信春虐殺事件）、③毛利基特高課長の三益隠し、④最大の疑惑は三益入党の時期、⑤ゾルゲ事件の端緒について、⑥コミンテルンの密使小林陽之助と三益、⑦ゾルゲ事件の疑問を解く鍵「満州の事件」はこうして明かされた。

これらの疑惑追及は故石堂清倫・中野重治から渡部に委託されたものです。今やその真相が綿密な資料調査の裏付けをもって明らかにされる。

講演録はA4版で130頁を越えるため当日製本頒布します。日本共産党にも講演録は発送し内部の自浄努力を要請します。ご来場をお待ちします。

主催：現代史研究会

連絡先：090-7181-3291（由井）

の調査報告は、ゾルゲ事件研究にとって、極めて**重大な問題**であり、それが実証できたのは大きな成果であったと思っています。

この名誉棄損裁判問題の最大の焦点は、安田側の主張する「満州の事件をまけてもらうために松本三益は当局と取引をした」という点にありましたが、その点については未決着のまま残されて、名誉棄損で訴えた松本三益側があっさり裁判の取り下げをしたため、幕引きとなりました。

「満州諜報団事件」の真相を追って

ところがこの「満州の事件」は、関東憲兵隊の「満州合作社事件」とつながる広がりのあるものでした。関東憲兵隊は、ゾルゲ事件の摘発で華々しい功績を手に入れた警視庁特高の意趣返しのために、「尾崎秀実の系列がまだ満州に残っている」として、「満州合作社事件」をでっちあげ、それが「満鉄調査部事件」に波及していったのです。

ようやく私はその関係史料¹を発掘・研究することで、事件の真実に到達することができました。そして、史料発掘の経緯を含めた詳細をシンポジウムシンポジウムで報告²したり、『翻訳集』に論文³を掲載しました。それは1つの大きな現代史のドラマでもありました。ゾルゲ事件の最後に残された最大の謎はこうして遂に解明することができました。

昨年（米寿を迎えた）、私は、伊藤律の故郷の岐阜県瑞浪市の「伊藤律研究会」で、鈴木則夫愛知大学教授とともに「伊藤律とゾルゲ事件」などについて報告してきました。

本年1月には、柴山太関西学院大学教授から「野坂参三と神戸」というタイトルで講演を頼まれ、当センター幹事だった高木康行（故人）さんの協力で、何回も神戸に足を運び、野坂参三と福本義亮（兵庫県特高）との関係調査・研究の成果を中心にした報告をしました。野坂参三調査も石堂清倫（故人）さんからの委託によるものでした。

今回の講演会の取り組みは、その講演会実施のニュースが東京に伝わり「渡部の最後の報告を聞いておくべきだ」ということになったのだらうと思いま

す。

石堂清倫・中野重治からの宿題を成し遂げる

現代史研究会の根回しで、演題は「解明されたゾルゲ事件の端緒—日本共産党顧問松本三益の疑惑を追って」。場所は明治大学、日程は4月21日が確定。本来のタイトルは、「日本共産党顧問松本三益は当局のスパイである」でしたが、講演のタイトルにはあまりにもどぎつすぎる、という意見が出て若干塩梅（下線部）しました。

これは故石堂清倫さんから「中野重治と共に君に今後を委託する」と言われた報告です。石堂さんは具体的には何も私には語りませんでした。

石堂さんの示唆した松本三益スパイ説は、今回の私の報告のレジュメ **四）「九州地方委員会の党再建に派遣された西田信春⁴の虐殺事件と松本三益」8）石堂清倫は「松本三益はスパイだと断定」し著者に後事を託した**という部分です。

石堂清倫さんは、この事件で、石堂清倫さんの東京大学時代の親友であり同志だった西田信春を、当局に売ったのは、松本三益であるという。西田信晴の本（脚注*4）の年表を見ると、松本（当時、真栄田）三益は、農民オルグとして九州に派遣されていたが、西田逮捕の前年11月下旬に帰京している。

石堂さんはその具体的な内容を私には全く語りませんでした。私への私信の中で、石堂清倫・中野重治の2人の名を以て後事を君に託すと遺言されました。私はゾルゲ事件研究の合間に、長年にわたって野坂参三と西田信春が関わる事件の研究を続けてきました。

松本三益は沖縄では「革新の元祖」と言われています。また日本共産党の顧問でもあります。沖縄・那覇市でシンポジウム（「ゾルゲ事件と宮城與徳を巡る人びと」、日露歴史センター主催「第6回ゾルゲ事件国際シンポジウム」2011年）を開いたとき、沖縄の「OIL事件（1933—32年、教職員労働者

*1 「平賀貞夫に対する治安維持法違反事件関係・満州最高検察庁史料」。1933年の九州の共産党再建のために派遣された「西田信春（石堂清倫、中野重治の学友で同志）の逮捕、虐殺事件の真相報告会」に出席したとき、同席の松村高夫慶応大学教授たちの「満州合作者事件研究会」で報告、同研究会経由で提供された史料である。

*2 「満州諜報団事件の解禁された[新聞]記事とゾルゲ事件の驚くべき真相」（第7回ゾルゲ事件国際シンポジウム、上海2013年9月）、「ゾルゲ事件の端緒をめぐる諸問題」（第8回ゾルゲ事件国際シンポジウム、東京、2014年11月）

*3 「シンポジウム補足報告—川合貞吉『満州国際諜報団事件』の真相を追って」（『翻訳集』No.40、2014年6月）

*4 1933年2月11日、逮捕、虐殺された。石堂清倫・中野重治・原泉編著『西田信春書簡・追憶』土筆社、1970年、参照。

組合弾圧)」の端緒は松本三益だと二次会で報告したら、「そんなことをうっかり沖縄で言ったら五体満足で内地に帰れないよ」と言われたことを思い出します。松本三益が当局のスパイだという最大の謎は、これまで特高課長毛利基によって**巧妙に**隠蔽されてきました。

松本三益はいつ日共に入党したか？

松本三益は、一体、いつ共産党に入党したのか。古賀牧人編著『「ソルゲ・尾崎」事典』（アピアランス工房、2003年）には、「昭和6年（1931年）日本共産党に入党」と書いてある。（同書、587ページ）

私はこれまで、1928年、最初の普通選挙で井之口政雄が沖縄から立候補したとき、彼の政治秘書として真栄田三益が沖縄で活動、沖縄で最初の共産党細胞をつくった人物であると聞いており、それ故に沖縄の革新の元祖だといわれているのだと思っていたので、古賀氏にそのこと（1928年の間違いではないか）を告げました。

ところが古賀氏からは、「正確を期するために直接共産党本部に問い合わせる回答をもらって書いたのだ」として、**本部からの回答書と同封の松本三益死亡時の新聞記事（1998年7月20日付共産党機関誌「赤旗」）の切り抜きをコピーして送ってきたのです。その記事「中央委員会顧問松本三益の履歴」には、「1931年10月入党」と記載がありました。**ちなみに、松本三益をインターネット上で検索すると、1つの例外もなく「1931年入党」と書かれているが、「10月入党」と書かれたものは1つもありません。そこにはある理由があるのですが、その点について今回の講演で詳細に報告します。

松本三益が沖縄の共産党の集会で講演するときには、例外なく1928年沖縄で選挙のときに那覇で初めて共産党細胞を作った話を高らかにうたいあげます。その物語は聴衆に感動すら与えます。戦前の厳しい弾圧の中で決死の覚悟で入党し、細胞建設をした活動の物語です。

それについて、沖縄国際大学の安仁屋政昭教授も『近代日本社会運動史人物大事典』で、同じように書いている。その同一人物が「松本三益の共産党入党は1931年」だと、書いている。研究者としてはありえないことです。共産党員でない者に**どうして**共産党細胞が組織できるのか、これほどでたらめな

話はない。

松本三益の活動舞台は大坂でした。1924年、沖縄県人会の機関紙『同胞』の編集発行人であり、翌25年には全日本無産者青年同盟の結成を指導し、関西沖縄県人会に結集した人たちのうち共産党に入党した者は全員が検挙されたと書きながら、松本三益は検挙をまぬがれている。それはなぜだと質問した者はいない。

沖縄で松本三益は、1928年入党をうたいあげ、共産党の公式見解では1931年10月入党と二刀流を使いこなしてきた。ところが筆者が丹念に『特高月報』をめくっていくと、意外にも「三益の入党は昭和7年（1932年）7月下旬入党」（『特高月報』昭和8年9月分）と書いてある。

共産党員が検挙されると、先ず最初に検事の「人定訊問」と呼ばれる共産党への入党時期、推薦者の氏名、活動歴などが詳細に聞き取られる。これは例外がない。いくら二刀流の達人でも三刀流は使いこなせないだろう。戦後の公安調査庁の史料や米軍の共産党幹部に対する調査には、松本三益は例外なく1928年入党となっている。

松本三益は日本共産党員の中では、たった1回しか起訴された経験がない。それは九州の2・11事件（このとき西田信春が虐殺された）で西田とともに中央から農民オルグとして派遣されたが、松本三益がその**九州全域の検挙直前の11月**に名目を付けて東京に呼び戻されて、検挙をまぬがれた。当時、日本共産党中央には当局のスパイ大泉兼蔵がいたから、容易に中央からの指令で呼び戻すことは可能だった。

ところがその事件は九州で500人を越える検挙事件だから、記事が解禁されると、号外を出して大見出しで報じられた。その記事には、中央から派遣された西田と並ぶ最高幹部だから、真栄田（松本）三益の実名で4ヵ所に渡って書かれている。当然、検挙前に消えた松本三益に疑惑が及ぶ。三益たちが入党させた九州の人たちが、わずかに党歴5～6ヵ月というのに対して、懲役5年～6年の刑が科せられた。

毛利特高課長による松本三益隠しの妙手

松本三益はその事件の記事解禁と同じ時期に、九州の同志たちから三益に疑惑がかからないように、

そこで毛利基が三益隠しの妙手を放った。「農民闘争社事件」がそれである。松本三益は、「農民闘争社事件」で検挙され、懲役2年を宣告されたという ことになっている。

これは全くおかしい表現だが、前叙した、松本三益が名誉棄損で訴えを起こした事件で、安田徳太郎の反証として、守屋典郎弁護士は、松本三益が「1935年7月13日から1936年9月23日まで千葉刑務所に在監中」であるという在監証明書を提出した。ところが「懲役2年」のはずがこの「在監証明」によると1年と70日である。

毛利特高課長の三益隠しはまだある。

1934年、日本共産党中央委員会は、袴田里見の検挙を以て潰滅し、戦前は再建できなかつた。だが引き続いて共産主義者は再建をめざして活動を続けた。コミンテルンからの働きかけもあった。毛利はそこに三益の存在価値を認めて大事に秘匿していた。

日本共産党の潰滅は、コミンテルンに日本共産党の活動並びに日本の国内情報が入ってこなくなった。時代は日独伊三国のファシズムが第2次世界大戦に突入しようとする時期に当たる。こうした情勢を背景にしてコミンテルンから日本共産党のその後の事情の調査のために何人もの密使が派遣された。

今回の講演の重要な柱の1つに、講演会配布レジュメの八)「**コミンテルンの密使小林陽之助の検挙と三益証言の欺瞞を暴く**」がある。

松本三益は小林陽之助と接触した数少ない現役の共産党員であるため、共産党機関紙『前衛』で「党の旗を守ったおれた小林陽之助同志をおもう」

(1962年8月号)を発表した。私はこの論文を詳細に検討した。その結果、ここに書かれていることは100パーセントが虚構であるという結論に達した。この詳細も講演会で**報告を予定しています**。

ここまで来るとゾルゲ事件の「伊藤律端緒説」などは特高宮下弘個人の謀略などではなく、もっと大きな権力のゾルゲ事件に対する対応だったことがわかります。

残された「ゾルゲ事件」の研究課題

この講演「松本三益はスパイである」のほかに、私が「ゾルゲ事件」を探求して得られた成果としては、まず「伊藤律端緒説の崩壊」を取り上げること

ができる。戦後、唯一人の語り部となった川合貞吉の著作の虚構を暴きなど、これまでに私が取り組んできた研究成果を次に要約してみる。いずれも小冊子にして頒布したが、当初、全く反応がなかったものである。

(1)、「尾崎秀実の10月15日逮捕は、検事局が作り上げた虚構。**真実は14日逮捕である**」

『特高月報』には、尾崎秀実の逮捕は**10月15日**と書かれており、これが通説となっていた。ところが昨年、孫崎享著『日米開戦のスパイ』が出版された。孫崎さんは私に直接こう言いました。「あなたのあの論文を見て“これだ”と思った。私の著作は貴方の論文がなかったら書けなかつた」と。

(2)「尾崎秀実は日本共産党員だった」

これについても、尾崎秀実は日本共産党など相手にせず、直接コミンテルンに登録されていたなどというのが通説でした。当時、特高警察・検察側は共産党組織の手入れの度に共産党潰滅を誇らかに宣告してきました。ところが彼らにとって総理大臣の顧問(近衛内閣の囑託)が共産党員だったとは認めがたく、内務官僚は言い逃れをしておいたのです。

ところが近衛内閣の書記官長風見章の日記には、

「**近衛公曰く、尾崎秀実の公判には20名ほどの特別傍聴人在りたるが、その中の一人より富田前内閣書記官長が伝聞したりとて語れるところによれば、尾崎は頗る冷静なる態度にて裁判長の訊問に答え、且つ率直に共産党員たるを自認したる由なりと**」(『風見章日記・関係資料』みすず書房、2008年、200ページ)

私はこれまで、当局が発表する内務省史料は裏付けのない限り信用するな、と主張し、自分でも必ず大事なことは裏付けをとってきました。これは『翻訳集』の終刊に当たって、今後の研究者に伝えておきたいことの1つです。私のゾルゲ事件との格闘は、まさにこの点にあったのです。

この講演録は小冊子にして頒布することにしてはいるが、A4版で140ページになる大冊です。裏付け史料を沢山入れました。

会員各位の講演会へのご来場と、筆者の最後となるかも知れない渾身の力作をどうかご覧いただきたい。長いことお付き合いとご鞭撻有り難うございました。感謝します。

拝復

五月八日付のお手紙をいただきました。

安田徳太郎氏に対する全面的反論としては、新日本出版社の『文化評論』一九七六年六月号 弁護士守屋典郎「聞き書き」と戦前史の真実 安田徳太郎氏のあやまりを正す！」があります。

また、松本三益氏の『自叙』 限定出版 非売品（一九九四年三月三十一日発行）で「三十一 くやしい思い出」のなかで触れられています。

この二つの該当箇所を資料として同封致しますが、お手紙にある通り「反対意見があれば、それを併せて記録」する意味で守屋典郎弁護士の論文全文を収録いただくよう要請致します。

日本共産党中央委員会

二〇〇一年五月二二日

古賀牧人様

日本共産党中央委員会顧問

松本三益さんが死去

19
9P. 7-20



県三郷市の、みさと協立病院で死去しました。九十四歳でした。遺族は、妻、ツルさん。故人の遺志で葬儀はおこないません。連絡先は日本共産党中央委員会厚生部。

故松本三益中央委員会顧問の略歴

日本共産党中央委員会顧問
松本三益(まつもと・さん
(き))さんは十九日午後零時
十分、急性肺炎のため埼玉

一九〇四年(明治三十七年)二月二十日、沖繩県那覇市で生まれました。二二年大阪で阪神電鉄に勤め、日本労働総同盟に加盟して労働運動に参

加。二五年日本無産青年同盟大阪府委員長、二六年東洋紡スト指導で検挙、投獄。二八年第一回普通選挙で沖繩で活動。三一年十月、日本共産党

に入党、党中央農民部員など。四〇年七月に検挙され、四二年三月の釈放以後、敗戦まで運動から離れました。四五年十一月、再入党。中央委員会農民部勤務、のちに副部長。四七年の第六回党大会で中央委員に選出、書記局長、農民部長。五〇年、占領軍により公職追放。五六年から選挙・自治体部長、市民部長。この間、衆院議員選挙で栃木一区、東京二区から立候補。六一年の第八回党大会以降、中央委員。市民・中小企業部長などを歴任。七七年の第十四回党大会で中央委員会顧問に推され、現在にいたりました。九五年、五十年党員に登録されました。